

はじめに・・・

この本の作成は、2018年の梅雨のある日、私学の小学校の校長先生との面談の中で、「小学校の3・4年から英語が必修化になったがどう教えていいのか困っている」、というお話を伺ったことがきっかけになりました。

私は小学校に英語教育がない時代の日本で育ちましたが、母が英語塾を経営していたおかげで小学校の終わりころから少なくとも週3-4回はネイティブの発音を聞き、英語を話す機会に触れていました。そんなこともあり、23歳の時のアメリカのバージニア工科大学交換留学の時には自信満々に飛び立ちましたが、予想に反し、その1年間の私はとにかく英語に泣き通しでした。もちろん授業内容は一回では聞き取れないので、クラスに録音機（もちろんその頃はカセットテープ式）を持ち込んで、寮に帰って何回かテープを巻き戻しして聞き返す。それでも何を言っているのか分からない。授業で知り合った友達にイエス、ノーでは答えられない質問をされ、聞き取れないから聞き返しても、まだ何を質問されているかが分からない。2回は恥ずかしくて聞き返せないからとりあえず「イエス」、と答えるとポカンとした顔をされ、さらに恥ずかしい思いをする。そんなことの繰り返しで若い、ガラスのような私の心は幾度となく音を立てて割れ、しまいには人に会いたくない、といった引っ込み思案さんが大きく顔を出すようになっていました（苦笑）

そんな私でしたが、気づくとアメリカに住んで早20年。まだまだ英語のレベルは発展途上ですが、それなりに会話ができるようになり、そうしていくうちに「外国人」に対して萎縮するような気持ちが減り（今では私が外国人ですが（笑）、人とコミュニケーションを通じて新しい文化を学ぶ喜びが増していきました。今では二人のこどもにも恵まれ、娘は中学生、息子は小学生（高学年）になりました。

アメリカでは英語だけでなく、Good Citizenshipという人としての在り方の精神も学びました、日本語に直訳すると「よき市民であること」ですが、自分のことだけでなく、他人への思いやり、尊重、助け合いを通して社会の一員として責任ある行動を心がけることに重きをおいています。そしてアメリカ人は褒め上手！大したことがなくてもすぐ人のいいところを見つけ、日本人の私からすると、そんなことで褒める！？それ褒めすぎでしょ、といったほどとにかく褒める。小学校でも生徒のそういったいい行動を、全校生徒を集めて表彰する時間が年に何回も設けられ、父兄も見学できたりしました。

こういったアメリカでの苦いことや楽しい経験、そして英語圏での育児経験を通して今、改めて日本の小学校での「実際に使える英語力の教育」を考えた時、次の5点にこだわりたいと思いました。まず第一に、教科化される前のこの3・4年生の時期に、英語を身近なものと感じ、学ぶ喜び・自信につながれるものにするということ。そのために、日本語でも使われるような親しみのある英単語だけを選択することで英語へのハードルをさげ、その英単語をつなぐことで簡単に英文が作れて英語が話せる、対話できるということ学べるように構成しました。

第二に題材選びにこだわりました。社会性を学び、主体性が育ち始めるこの大事な時期における英語の学習は、単語や文法を学ぶだけの場ではなく、英語の学習を通じてこどもたちの地球の一員としての責任感・ポジティブな姿勢を促す機会になるようなテーマを選んでいきます。

第三にフォニックスという方法での英語の読み方を導入をしています。フォニックスは英語圏で育つこどもたちが学ぶ英単語の読み方の習得法ですが、小学校の3・4年生の段階であれば、日本で育つこどもたちにも難なく習得できる方法で、今後の英語の発音や単語の読み方に好影響を与えられると考え、導入を勧めています（次のページ参照）。

第四に、小3・4年生の英語学習で求められている「聞く・話す」を中心にしながらも、英語圏での英語学習によく使われるワードクロスやワードサーチなどの遊び要素を取り入れることにより、「読む・書く」の導入部分を楽しく学習できるように構成し、次の5・6年生のステージにスムーズに移行できるように土台を築けるようにしています。

そして最後に、英語をより身近なものに感じてもらえるよう、教材の中にでてくる単語や文をアメリカ人でもあり英語を母国語とする現在5年生の息子（質問文は中2の娘）の声で収録し、ウェブサイトが付録教材として掲載しています。声を聞き一緒に発声することで、同年代の小学生の生の英語の発音を学べるようになっていきます。

英語、地球社会、今の自分、将来の自分、全てにポジティブにと願って「ポジ（ポジティブ）えいご」と名付けました。この教材が、これからのいろんな分野での将来の日本代表を育てている先生方の助けになればと願ってやみません。